



Penn Foster High School

Opening Doors  
from Japan to the World

日米2つの卒業資格が示す、未来への扉

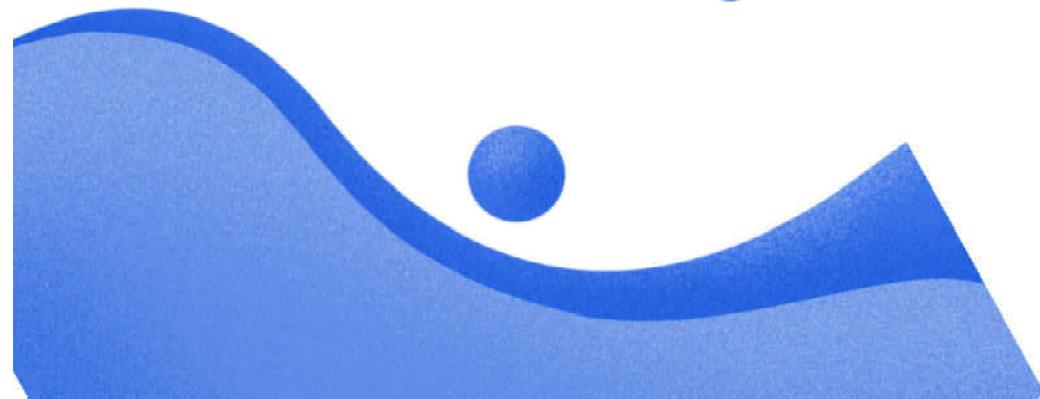
# 日本の高校から 世界へ

学びの多様性を拓く  
国際教育の可能性

監修：日本通信教育学会理事 手島 純

岩崎宗仁 — 著

Muneto Iwasaki

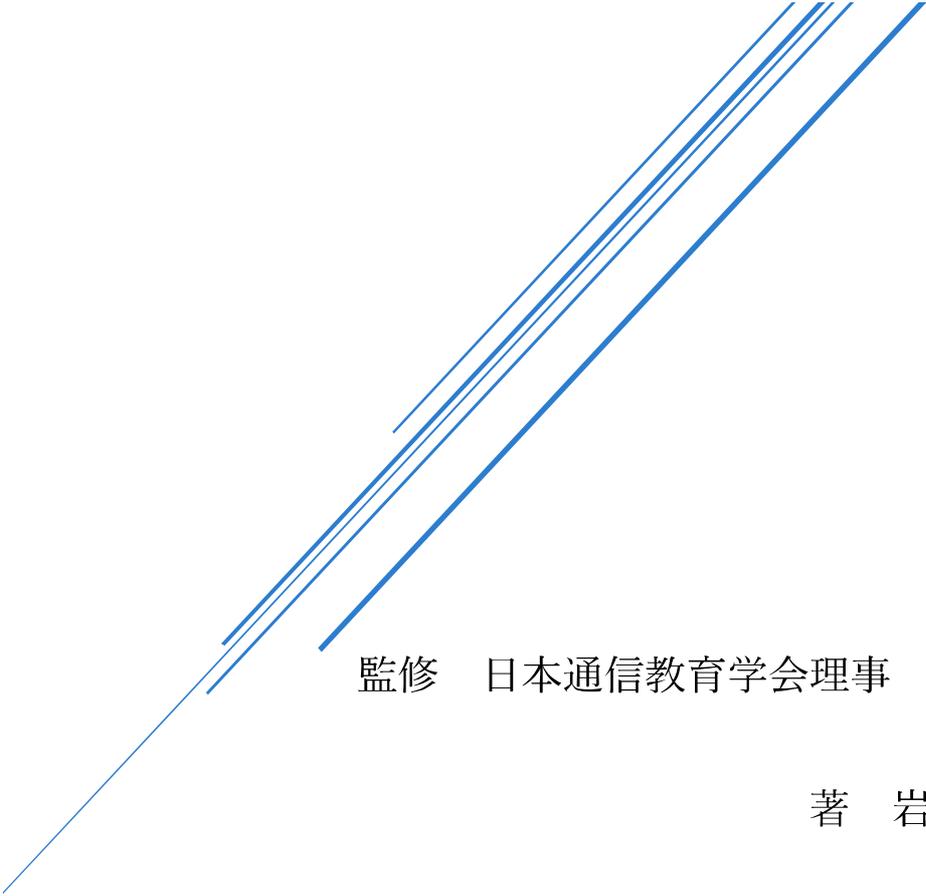


# 日米2つの卒業資格が示す、未来への扉 ～日本の高校から、世界へ～

## お試し版

「はじめに」 「第1章」 「第2章」 「第6章の一部」  
「エピローグ」 「おわりに」 を、ご覧いただけます。

ご関心をお寄せいただけましたら、  
ぜひ本書をお手に取ってお読みください。



監修 日本通信教育学会理事 手島純

著 岩崎宗仁

― 表記の統一について ―

本書では、米国通信制高校 Penn Foster High School を取り上げています。縦書き本文中では読みやすさを優先し、名称を「ペンフォスター高校」と表記します。なお、初出時のみ正式名称 (Penn Foster High School) を併記しました。

以降はすべて「ペンフォスター高校」と記載していますが、いずれも同一の学校を指しています。

## はじめに 日本の高校に「もうひとつの扉」を

私は、A J インターナショナルアカデミーの代表であり、当アカデミーはアメリカのオンライン制高校「Penn Foster High School (ペンフォスター高校)」の日本事務局を担う。2001年の設立以来、「一人も取り残さない教育」を目指して、多様な背景をもつ若者たちの学びを支えてきた。その中で私が強く感じてきたのは、日本の高校制度にはまだ十分に応えきれていない現実がある、ということだ。

不登校、病気、家庭の事情、海外在住などなど、子どもたちが学びにアクセスしづらくなる理由はさまざまである。それにもかかわらず、高校教育は依然として「通学」と「年齢」を前提に組み立てられている。結果として、「学びたい」と願っているのに、その制度の外に押し出されてしまう生徒たちがいる。私は学生時代に世界を旅し、教育を受けられない子どもたちと出会った。教育機会の有無が人の未来をどれほど左右するかを実感したことが、今も活動の原点になっている。そうした中で出会ったのが、1890年に創設されたアメリカの通信制高校・ペンフォスター高校である。ペンフォスター高校は、世界的な認定団体Cognia から公式に認定を受けており、完全オンラインで高校卒業資格を取得できる学校だ。その特徴は、年齢や学年に縛られず、世界のどこにいても学べる自由な設計にある。

本書では、このペンフォスター高校を活用した「ダブルディプロマ」という新しい学びの形を紹介する。ダブルディプロマとは、日本の高校に在籍しながら、アメリカの高校卒業資格も同時に得る仕組みである。ここで大切なのは、日本の高校を離れることなく、日本の教育に「もうひとつ」学びを重ねることだ。両方を経験するからこそ得られる視野の広さ、深い教養が、進学や就職だけでなく、一人の人間としての成長に大きくつながる。

すでに国内でも、この仕組みを取り入れ、在籍生徒に提供し始めている学校がある。本書では、そうした教育現場での取り組みや、生徒たちの声を紹介しながら、制度の全体像と可能性を描き出していく。さらに、導入を検討する学校に向けては制度的な仕組みや運営の工夫を、個人として関心を持つ生徒や保護者に向けては、学びの内容やキャリアの可能性を具体的に解説する。

「日本の高校に通いながら、アメリカの高校でも学んでみたい」

「国内の大学進学を考えているが、国際的な学びも経験したい」

「学校の制度を超えて、自分らしい学びを探したい」

そんな思いを持つすべての人に、本書が新しい選択肢を示すことを願っている。教育とは、制度に生徒を合わせるものではなく、生徒の可能性に合わせて制度を編み直す営みである。ペンフォスター高校とのダブルディプロマは、その実践のひとつの形だ。

本書が、教育に関わるすべての方にとって「学びとは何か」を問い直すべききっかけとなり、そして若者たちにとって「もうひとつの扉」を開く一助となることを心から願っている。

AJインターナショナルアカデミー代表／ペンフォスター高校日本事務局

岩崎 宗仁

はじめに 日本的高校に「もうひとつの扉」を…………… 2

第1章 広がる学びの選択肢…………… 11

    高校教育の現在地と多様化するニーズ…………… 12

    通信制・全日制・インターナショナル、それぞれの強みと限界…………… 13

    ダブルディプロマという新しい可能性…………… 15

第2章 アメリカ通信制高校「ペンフォスター」とは…………… 19

ペンフォスター高校の歴史と理念	20
Cognia 認定校としての国際的評価	21
世界の大学につながるアメリカの高校資格	23
第3章 学びの中身とその価値	26
英語で学ぶりサーチ・ライティング	27
アメリカ史・社会・憲法を学ぶ意義	28
生活に根ざした数学とリベラルアーツの基盤	30
日本の高校とアメリカの高校の「両輪」が育む教養	31
第4章 ペンフォスターの学習システム	35
オンデマンド型学習の仕組み	36
学習の進め方と時間の使い方	40
単位制の柔軟性と修了モデル	42

学習環境とサポート体制	44
日本の高校との両立を可能にする理由	46
第5章 導入校の声と実践	49
八洲学園大学国際高等学校（通信制高校）	50
白鵬女子高等学校（全日制女子校）	54
Tokyo West International School（インターナショナルスクール）	58
導入校が示す、新しい教育のかたち	62
第6章 生徒の言葉 ダブルディプロマ体験記	65
木本由香里（仮名）さん（八洲学園大学国際高等学校）	66
金井空鈴さん（白鵬女子高校）	69
三野龍平さん	73
小林美憂さん（仮名）	76

学びを通じて得られた成長と変化……………	81
第7章 保護者と生徒にとっての意義……………	85
進学準備としての強み（国内外の大学へ）……………	86
就職・キャリアでの評価……………	87
「教養」が一生の財産になるということ……………	88
第8章 未来を拓くダブルディプロマ……………	91
高校生活を「日本かアメリカか」ではなく「両方」で……………	92
生徒と学校、双方に広がる可能性……………	92
誰もがアクセスできる学びへ……………	93
第9章 社会が見るダブルディプロマ——大学・企業が評価する新しい学び……………	96

日本の大学が見る「探究力」と「主体性」	97
海外大学が見る「基礎力」と「学習文化の二重性」	98
企業が見る「自己管理能力」と「グローバルマインド」	99
社会が求める「二つのリテラシー」	100
エピローグ 未来を拓くダブルディプロマ	103
おわりに	107



第1章 広がる学びの選択肢

## 高校教育の現在地と多様化するニーズ

日本の高校教育は、戦後の制度改革以来、全日制を中心とした「通学型」を基本に発展してきた。多くの高校生が朝から夕方まで学校に滞在し、授業や部活動、学校行事を通じて青春を過ごす姿は、日本社会の文化として定着してきたと言える。大学進学や就職に直結する「高校卒業資格」を、全国の誰もが取得できる仕組みは、世界的に見ても高い普及率を誇っている。

しかし、その制度が万能であるわけではない。いじめや不登校、病気や障害、家庭の事情や経済的要因、あるいは海外在住といった理由によって、「通学を前提とする学び」に適応できない生徒は少なくない。文部科学省の調査によれば、不登校の中学生・高校生の数は年々増加し、特に高校段階では年間10万人を超えている。教育の機会そのものを閉ざされる若者が増えていることは、社会全体にとって深刻な課題である。

制度の柔軟性にも限界がある。日本の高校は「学年制」を基本としており、同じ年齢の仲間と同じペースで学ぶことを前提にしている。そのため、一度学びから離れると、復帰の際に「学年が合わない」「年齢が合わない」といった制度的な壁に直面する。結果として「高校卒業」のハードルが想像以上に高く感じられ、学び直しを断念する生徒も少なくない。

さらに、グローバル社会における教育ニーズも変化している。英語でのコミュニケーション力

や異文化理解、論理的に考え表現する力は、進学や就職の場でますます重視されるようになっていく。しかし、日本の高校教育だけでは十分にカバーできない領域があることも否めない。特に、海外大学を目指す生徒にとっては、日本の高校教育と海外で求められる基準との間に大きなギャップが存在している。

こうした背景のもと、全日制・定時制・通信制といった従来の選択肢だけでは対応しきれない層が広がっている。リースクールやオンライン学習、海外の教育機関との連携など、従来の「高校」という枠組みを超えた学びに関心を寄せる家庭も増えている。

日本の高校教育は「すべての生徒が同じ道を歩む」という前提から、「それぞれの生徒が自分に合った道を選ぶ」という時代へと移行しつつある。多様化するニーズにどう応えるのか。それが、いま教育現場に突きつけられている大きな課題である。

### **通信制・全日制・インターナショナル、それぞれの強みと限界**

日本の高校制度は、大きく分けて「全日制」「定時制」「通信制」の三つが基本である。さらに近年は、インターナショナルスクールや海外大学附属の教育機関といった、新しい学びの場も存在感を増している。それぞれには強みがある一方で、制度上の限界も抱えている。

全日制高校は、日本の高校教育の主流であり、約7割の生徒が通っている。毎日登校し、クラ

ス単位で学びを進め、部活動や学校行事を経験できることが最大の特徴だ。仲間と共に過ごす時間は人格形成の基盤となり、進学や就職においても社会的に高い評価を受ける。一方で、決められた時間割や登校を前提とするため、体調や家庭事情などで通学が困難な生徒には対応が難しい。また、画一的な学習進度に合わせなければならず、学び方の自由度は低い。

通信制高校は、登校の頻度が少なく、自宅学習を中心に単位を修得できる仕組みを持っている。学習の柔軟性が高く、年齢や背景を問わず広く門戸を開いている点が大きな強みである。不登校経験者や社会人、アスリートなど、多様な人々が自分のペースで学べる。しかしその一方で、学習の主体性が求められるため、自己管理が難しい生徒にとっては継続が課題となる。また、学びのコミュニティが希薄になりやすく、友人関係や学校行事を重視する層には物足りなさを感じさせることもある。

インターナショナルスクールは、英語を主言語とし、国際的なカリキュラム（IB<sup>1</sup>やAP<sup>2</sup>など）を導入している場合が多い。海外大学への進学に有利であり、英語力や異文化理解を早い段階で身につけられる点は大きな魅力だ。しかし、授業料が高額であること、日本の高校卒業資格を同時に得られない場合があること、国内大学受験に必要な科目との接続に難しさがあることが課題となる。

このように、全日制は「社会的信頼性と一体感」、通信制は「柔軟性と多様性」、インターナショナルは「国際性と英語力」という強みを持つ。しかし、いずれも万能ではなく、制度ごとの限

界が存在する。だからこそ、それぞれの長所を活かしつつ弱点を補う「ハイブリッドな学び」が模索されている。その延長線上にあるのが、日本と海外の高校資格を組み合わせるダブルディプロマという発想である。

【注】

1 IB (International Baccalaureate) : スイスのジュネーブに本部を置く国際的な教育プログラム。世界共通の基準で大学進学資格を得られる「国際バカロレア・ディプロマ資格 (IB Diploma)」が特徴で、思考力・探究力・国際理解を重視する。

2 AP (Advanced Placement) : アメリカの大学進学準備課程。高校在学中に大学レベルの科目を履修でき、一定の成績を収めると大学入学後に単位として認定されることもある。College Board (米国大学進学委員会) が運営している。

## ダブルディプロマという新しい可能性

日本の高校教育には、全日制・通信制・インターナショナルといった多様な形が存在するが、

それぞれには限界もある。全日制は学びの一体感と信頼性を持ちながら柔軟性に欠け、通信制は自由度が高い反面、学びのコミュニティが弱く、インターナショナルは国際性に優れるものの費用や国内制度との接続に課題を抱えている。こうした状況を踏まえると、既存の仕組みのどれか一つに依拠するのではなく、複数の仕組みを組み合わせる「ハイブリッド型」の学びが求められている。

その一つの解答が、ダブルディプロマである。ダブルディプロマとは、日本の高校に在籍しながら、アメリカの高校卒業資格も同時に取得する仕組みを指す。重要なのは、日本の高校教育を捨てることではなく、むしろその上にもう一つの学びを重ねる点にある。二つの教育制度を横断的に経験することで、日本的な基礎教養と国際的な學術スキルの双方を身につけることができる。

アメリカの高校で学ぶ科目には、英語でのリサーチや論文執筆、アメリカ史や政府、アメリカの社会（日本で言う公民）といった、日本では触れる機会の少ない分野が含まれている。これらは、アメリカの多くの大学では必修に位置づけられており、進学後の学びを大きく助ける。また、英語による学習を通じて、国際社会で必要とされる表現力や論理的思考力が鍛えられる。一方で、日本の高校で培う国語力や共同体意識、地域とのつながりは、アイデンティティの基盤として欠かせない。両方の強みを同時に持つことは、進学や就職において強いアピールとなるだけでなく、長期的に「深い教養」として自分を支える。

すでに一部の学校では制度として導入が始まっており、在籍する生徒にとって新しい選択肢と

なっている。さらに、制度として導入されていない学校に通う生徒であっても、個人としてダブルデイプロマに挑戦する道は開かれている。つまり、この仕組みは「特定の学校だけの特権」ではなく、より広く活用できる可能性を秘めている。

ダブルデイプロマは、日本の高校教育に「もうひとつの扉」を加えるものである。既存の枠組みに収まりきらない多様なニーズに応え、次世代の学びに新しい選択肢を提供する。この新しい可能性をどう生かすかは、学校と生徒、そして社会全体に委ねられている。



第2章 アメリカ通信制高校「ペンフォスター」とは

## ペンフォスター高校の歴史と理念

ペンフォスター高校は、1890年にアメリカ・ペンシルベニア州で創設された。産業革命後のアメリカ社会では、工業化の進展に伴い、工場や鉱山で働く労働者が新しい知識や技能を求められるようになっていった。当時の教育制度は、通学を前提とする仕組みに偏っており、働きながら学ぶことは容易ではなかった。そうした時代背景の中で誕生したのが、郵便を利用した「通信教育」である。

ペンフォスター高校の創設者であるトーマス・J・フォスターは、石炭鉱山で働く労働者に教育の機会を提供することを目的に、通信制による講座を始めた。現場で事故が多発していた背景には、安全や技術に関する知識不足があると考え、働きながらも学べる教材を開発したのである。この取り組みは労働者の安全と生活向上に直結し、教育が人生を変える力を持つことを示す先駆的な試みとなった。

その後、ペンフォスター高校は時代の変化に合わせて教育内容を拡充し、ビジネスやリベラルアーツの分野にまで学びの領域を広げていった。20世紀後半には、郵便での通信教育からオンライン教育へと移行し、現在では世界中からアクセスできるデジタル学習プラットフォームを整備している。こうして130年以上の歴史を通じて、学びの機会を社会の隅々にまで届けるという

理念を一貫して守り続けてきた。

ペンフォスター高校の理念の根底にあるのは、教育を「限られた人の特権」ではなく「誰にでも開かれた権利」とする考え方である。年齢や居住地、社会的背景にかかわらず、学びたいと願う人が学べる環境を提供すること。それが創設当初から受け継がれてきた精神である。この理念は現在のオンライン制高校としての姿にも脈々と息づいており、「学ぶ機会を制約から解放する」という使命を果たし続けている。

## Cognia 認定校としての国際的評価

ペンフォスター高校が持つ最大の強みの一つは、国際的に認められた認定を受けている点である。ペンフォスター高校は、アメリカ最大級の学校認定団体である Cognia（コグニア）から公式認定を受けている。Cognia は、旧 AdvancedED を母体とし、全米の公立・私立学校、さらに世界100カ国以上の教育機関を対象に認定を行っている組織である。その評価は学習指導、運営体制、学習成果、継続的改善など多岐にわたり、教育の質を保証するための包括的な基準となっている。

日本の学校制度においても、Cogniaは文部科学省が指定する「海外通信制高校の認定機関」として位置づけられている。このため、ペンフォスター高校の卒業資格は、国内の大学入試においても正式に「高等学校卒業資格」と同等に扱われる。また、海外の大学に進学する場合にも、国際的に通用する評価基準を満たしていることが証明されるため、出願資格の保証となる。

国際的な認定を受けていることは、教育の信頼性を担保するだけでなく、生徒にとっても大きな安心材料である。オンライン制高校という形態に対して、「本当に大学進学に通用するのか」「社会的に認められるのか」といった不安は少なくない。Cogniaの認定は、その不安を解消し、教育の質が世界基準であることを保証している。

さらに、Cogniaは単なる資格認定にとどまらず、認定校に対して定期的な評価や改善指導を行っている。ペンフォスター高校もその枠組みの中で継続的に教育改善を進めており、学習内容やシステムが時代の要請に応じて更新されている。こうした国際的な評価体制の下にあることが、ペンフォスター高校を単なる「オンライン講座」ではなく、正式な「高校」として位置づける根拠になっている。

ペンフォスター高校の卒業証書は、日本国内の大学進学、海外大学への進学、さらには就職活動においても、信頼性のある学歴として機能する。これは「通信制」や「オンライン」という形式に偏見を抱く声に対して、確かな裏付けとなる事実である。教育の形は変わっても、その質と評価が国際的に保証されていることこそが、ペンフォスター高校の大きな価値だと言える。

## 世界の大学につながるアメリカの高校資格

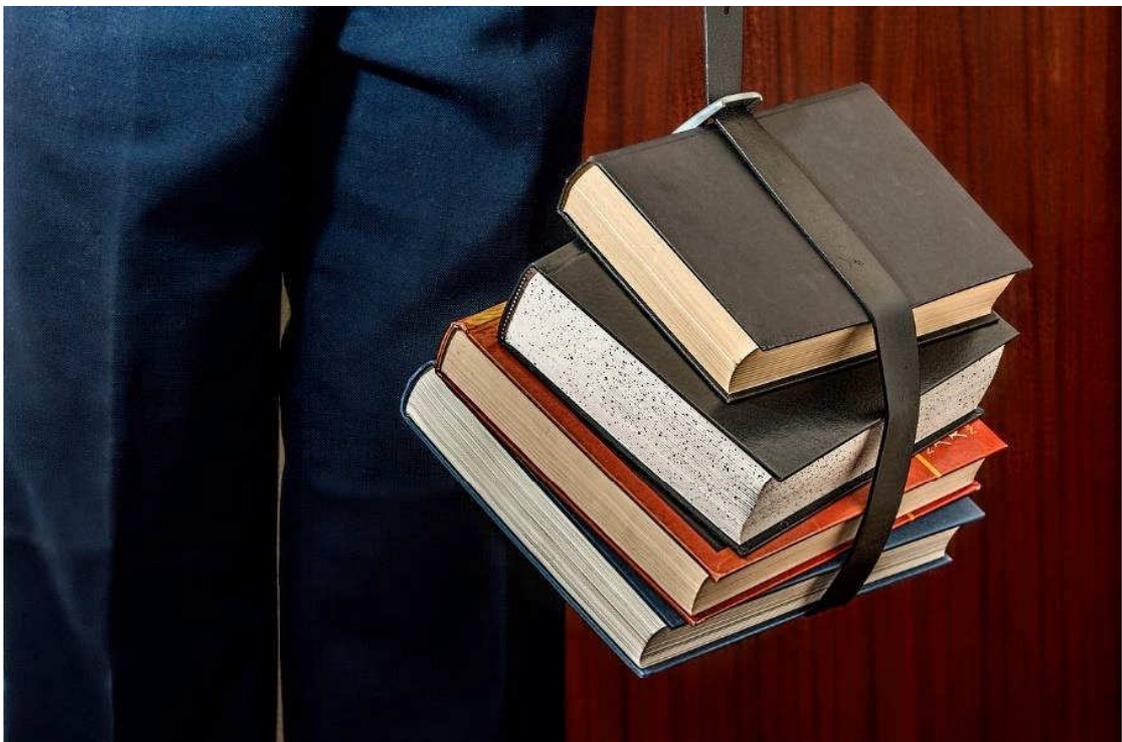
アメリカの高校卒業資格は、世界各国の大学に進学するための基礎資格として広く認められている。ペンフォスター高校の卒業証書も例外ではなく、国際的に通用する学歴として位置づけられている。これは単に「アメリカの高校で学んだ」という事実だけでなく、教育内容が世界基準に照らして保証されていることに由来する。

アメリカの高校課程では、英語による読解力・作文力の養成、論理的思考やリサーチスキル、アメリカ史やアメリカの社会に関する知識の修得が重視される。これらは、アメリカ国内の大学が入学者に当然求める学力であり、学士課程で必要となるアカデミックスキルの土台となる。ペンフォスター高校の卒業生は、この基盤をすでに高校段階で学んでいるため、アメリカの大学入学後に大きなアドバンテージを持つことになる。

さらに、アメリカの高校卒業資格は、北米だけでなくヨーロッパやアジア、オセアニアの大学においても、入学資格として認められるケースが多い。特に英語圏の大学では、現地の高校卒業証書を有していることが入学審査の前提条件となる場合もある。日本の高校卒業資格しか持たない場合、別途英語試験やファウンデーションコースを要求されることがあるが、アメリカの高校卒業資格を併せ持つことで、そのプロセスが大幅に簡略化されることもある。

日本国内においても、ペンフォスター高校の卒業証書は日本の高等学校卒業と同等に扱われ、大学入学資格を有するものとして認められている。つまり、ペンフォスター高校を卒業すれば、日本と世界の両方の大学に門戸が開かれることになる。これは、進路を国内だけに限定せず、世界を視野に入れる生徒にとって大きな魅力である。

高校卒業という一点は同じでも、日本の卒業証書とアメリカの卒業証書では、その後に広がる道が異なる。両方を手にすることは、選択肢を増やすだけでなく、自己の可能性を拡張することにつながる。ダブルディプロマが「未来の教育モデル」と呼ばれる理由は、まさにそこにある。



第6章 生徒の言葉 ダブルデイプロマ体験記

## 小林美憂さん（仮名）

小林美憂さん（仮名）は、日本の全日制私立高校に通いながら、アメリカの通信制高校・ペンフォスター高校に入学し、日米両方の高校卒業資格取得に挑戦した。中高一貫のミッション系学校で育った彼女にとって、その決断は大きな挑戦だった。学校には知らせず、自分の意志で進めたダブルディプロマ。そこには、「どうしても挑戦したかった」という強い思いがあった。

### 日本の高校とアメリカの高校、両方を卒業して見えた世界

私は中高一貫のミッション系の学校に通っていました。校風は厳格で、外の世界との接点が少なく、「おとなしくしていなさい」という空気が常に流れていました。だからすみません、体験談は仮名でお願いします。母校と波風立てたくありませんので。そんな私は小学生の頃から「世界を見たい」「アメリカで学びたい」という強い思いがありました。両親も理解を示してくれて、中学3年生の時に、実際にアメリカの高校を見学しに行きました。コロナウイルスの影響がまだまだ残っていた時期でしたが、アメリカは意外にも、みんな普通に生活していたのを覚えています。

アメリカの高校見学。そのとき目にした光景はいまも忘れられません。スターバックスの紙コップを片手に教室へ入る生徒、ベビーカーを押して登校する生徒、ユニークな髪形や服装の生徒。人種も育つ

た背景もさまざままで、驚きの連続でした。授業をのぞくと、数学ではみんなが関数電卓を使い、歴史の授業ではアメリカの視点で世界を語っていました。私が通う学校とはまるで別世界でした。

その経験がきっかけで、私は「アメリカで学びたい」と強く思うようになりました。けれど同時に、もう一つの思いが生まれました。

「日本のことも、もっと深く知っておきたい」。

アメリカの授業を見ていて気づいたのです。彼らは自分たちの国について、自分の言葉で語る力を持っていました。歴史や社会の授業では、教師に「あなたはどう思う？」と意見を求められ、みんなが自分の考えを堂々と述べていました。もしその場に自分がいたとして、「日本ではどうですか？」と聞かれても、私はきつと答えられなかったと思います。



「日本のことを知らないまま、アメリカを学んでも、本当の学びにはならない」そう思うようになりました。だから私は、まず日本の高校で学び、日本という国を理解した上でアメリカに挑戦しようと思ったのです。

日本の高校生活が始まり、私は毎日を忙しく過ごしていましたが、心のどこかに、アメリカで見た高校の自由な雰囲気が残っていました。様々な背景を持った生徒たちが、一つの議題について異なる視点から議論する姿。その光景が忘れられませんでした。

そんなときに出会ったのが、A Jインターナショナルアカデミーでした。オンラインで、アメリカの高校を卒業できる。そう聞いたときには、思わず声が出てしまうほど喜んだのを覚えています。日本の高校に通いながら、アメリカの高校の卒業資格も取得できる。その制度を知り、「これだ」と思いました。迷いはありませんでした。

「日本とアメリカ、両方の高校を卒業する意味があるのか」と思う人もいるかもしれませんが、でも、実際にアメリカの教育現場を見た私は、むしろ両方を学ぶことにこそ意味があると感じました。ペンフオスターの授業で興味深かったのは、アメリカの社会学、歴史、憲法などです。授業を通じて、「なぜアメリカの大統領があのような発言をするのか」「アメリカの意思決定の背景には何があるのか」が少しずつ理解できるようになりました。

同じ民主主義国家でも、日本は「行政権が内閣にある」のに対し、アメリカは「行政権が大統領にある」。憲法改正も、日本が一度も行っていないのに対して、アメリカ合衆国憲法は27回も修正されています。そうした違いを学ぶたびに、政治や社会を「構造」として見る視点が養われていきました。

私は高校2年の9月にペンフォスター高校に入学し、高校3年の6月に卒業しました。中学・高校の単位を置換できると説明を受けましたが、私はあえて21教科すべてを履修しました。全部、自分の力でやり遂げたいと思ったのと、そもそも日本の学校に英文成績証明書をお願いしても、あれこれ余計な詮索を受け、ペンフォスター高校の入学を止められると思ったからです。

ペンフォスターの学習ポリウムはそれほど重くありませんが、深く学びたい人には教材が豊富に用意されています。卒業後もログインして教材や映像授業を見ることができるので、卒業した今でも論文資料として活用しています。

ペンフォスター高校で得た学びは、日本の高校で培った基礎力とともに、私の大きな武器になりました。難関私学の法学部に総合型選抜で合格できたのも、この二つの学びがあったからです。日本の高校でも、アメリカの高校でも学んだ。両方の教養がある。これは、私にとって、大きなアピールポイントになりました。

私はこれから、大学の留学制度を利用して、アメリカの大学へ留学します。すでにアメリカの社会や文化を理解しているので、不安はありません。「日本ではどうですか?」と聞かれても、自分の意見を言える自信もあります。中学生のときに抱いた「アメリカで学びたい」という夢。日本の高校とアメリカ

の高校の両方で学んだ今、私はその夢を現実のものにしようとしています。かつて憧れだった「海外で学ぶこと」が、いまでは自分の言葉で世界と語り合うための一歩になりました。これからは、自分が感じた学びの自由と多様性を、次の世代に伝えられる人になりたいと思っています。

エピソード 未来を拓くダブルディプロマ

高校生活は、一生に一度しかないかけがえのない時間である。その時間を「日本かアメリカか」という二者択一で削るのではなく、「両方を経験する」という形で豊かにできるのが、ダブルディプロマの魅力だ。

世界は急速に変化している。AIやグローバル化の進展により、今日の常識が明日には通用しなくなる時代に、若者たちは自らの未来を切り拓いていかななくてはならない。そのために必要なのは、知識や資格だけではない。多様な学びを重ね、異なる視点を受け止め、どのような状況でも考え、選び取ることのできる力である。

ダブルディプロマは、その力を育む「もう一つの道」を示している。日本の教育を土台にしながら、アメリカの教育を重ねることで、広い視野と深い教養が生まれる。それは単に二つの卒業証書を手にする以上の意味を持つ。制度の枠を超えた経験は、若者の中に「未来を生き抜く軸」を確かに刻み込む。

保護者にとっては、わが子が世界を前にしても臆せず歩める安心感となり、学校にとっては、生徒に新しい可能性を開く教育の選択肢となる。そして、生徒自身にとっては、「自分らしい未来を選べる」という希望と自信となる。

教育は、制度に人を合わせるものではない。人の可能性に合わせて制度を編み直す営みである。ダブルディプロマは、その実践のひとつの形であり、日本の高校教育に新しい風を吹き込んでいる。

未来を拓くのは、制度でも環境でもない。学びを通じて育った一人ひとりの力である。ダブルディプ

ロマは、その力を確かに育み、次の時代を担う若者に新しい扉を開く。この本を手にとったすべての人に問いたい。あなたは、高校生の未来をどのように広げたいだろうか。その答えの一つが、ここにある。



おわりに

本書を通じて紹介してきたダブルディプロマは、決して特別な誰かのための制度ではない。学びたいと願うすべての若者に開かれた仕組みであり、日本の教育に新しい可能性をもたらす実践である。これまで数多くの生徒たちが挑戦し、悩み、そして乗り越えてきた姿は、その証明にほかならない。彼らの歩みは、「教育は誰にでも開かれているべきだ」という当たり前の理念を、具体的な形に変えてきたのである。

進学や就職のためだけに学ぶのではない。どのような未来を選んでも揺らがない力。それを育むのが教育の本質だと私は信じている。学びを通して身につけた知識や技術は、時代の流れとともに移ろうかもしれない。しかし、自ら考え、挑戦し、他者と協働する力は決して失われることはない。その普遍的な力を若い世代に育んでいくことこそ、教育者や社会全体に託された使命だろう。

日本とアメリカ、二つの高校を経験することで培われる広い視野と深い教養は、必ずや子どもたちの人生を支えてくれるはずだ。国境を越えて学ぶことは、単に語学力を身につけるためではない。異なる価値観に触れ、違いを理解し、そこから新しい自分を築いていくプロセスそのものが、未来を切り拓く力となる。ダブルディプロマは、そのきっかけを誰にでも提供する扉なのだ。

この本を手にとってくださった方が、「学びとは何か」「制度は誰のためにあるのか」を改めて考えるきっかけを得ていただければ幸いである。そして、この本に登場した生徒たちのように、ひとりでも多くの若者が「自分の可能性を信じて挑戦する勇氣」を持てることを願ってやまない。

教育の未来は、決して遠い理想の話ではない。目の前にいる一人ひとりの生徒の選択と挑戦の積み重

ねが、その未来を形づくっていく。本書が示した新しい扉を、より多くの若者たちが開いていくことを、心から祈っている。

令和七年十月二十日 岩崎 宗仁





◆ お問い合わせ ◆

ダブルディプロマの導入を検討されている高校（全日制・通信制・インターナショナルスクールを問わず）、またはフリースクール・支援学級などの教育機関の皆さまへ  
プログラム導入に関するご相談は、下記までメールにてお問い合わせください。

導入に関するお問い合わせ  
[admission@aj-academy.jp](mailto:admission@aj-academy.jp)

---

アメリカの通信制高校についてさらに知りたい方、または入学をご希望の方は、公式サイトをご覧ください。

AJ インターナショナルアカデミー公式サイト  
<https://aj-academy.jp/>

## 【著者プロフィール】

岩崎宗仁（いわさき むねと）

1975年6月、神奈川県相模原市生まれ。  
AJインターナショナルアカデミー代表。  
学生時代にバックパッカーとして世界30数か国を旅し、貧困や紛争、差別や教育格差の現場を目の当たりにする。そこで「学校とは何か」「教育とは誰のためにあるのか」という問いを抱き、25歳で教育団体を設立。「人と社会をつなぐ」「人と世界をつなぐ」ことを理念に、以来四半世紀にわたり国際教育に携わる。現在は国際教育コンサルタントとして、高校やフリースクールと連携し、オンライン教育やダブルディプロマ制度を通じて、一人ひとりに合った学びの道を切り拓く活動をしている。若者たちが「自分らしく学び、生きる力を育む」ことを支援するのがライフワーク。  
NPO留学協会（理事）、日本学校教育学会、日本通信教育学会に所属している。



テレビ討論で教育を語る筆者  
（ベトナム・ハノイ）

著書に「教育の未来地図 アメリカ通信制高校が示すもの」がある。

監修 手島純（てしま じゅん）

日本通信教育学会理事 星槎大学特任教授  
長く通信制高校の研究に携わる。著書に『これが通信制高校だ』『格差社会にゆれる定時制高校』等、編著書に『通信制高校のすべて』等がある。

---

2025年10月25日 初版発行

岩崎宗仁 著

ISBN：9798269812298

出版社名：Independently published

---

本書の内容は、著作権法上の保護を受けています。著者の許可なく、転載・複製・配布することを禁じます。

日米2つの卒業資格が示す、未来への扉  
～日本の高校から、世界へ～

## お試し版

「はじめに」 「第1章」 「第2章」 「第6章の一部」  
「エピローグ」 「おわりに」 を、ご覧いただけます。

ご関心をお寄せいただけましたら、  
ぜひ本書をお手に取ってお読みください。